

第Ⅳ群 座長のまとめ

広島大 耳鼻咽喉科

原田 康夫

私の担当の群における演題は二題で、いずれも三重大学耳鼻咽喉科より出題されたものである。鼻粘膜の透過性に関するもので、林秀俊氏の発表は鼻粘膜の吸収能に対するコカインの影響をみたものであり、コカインを家兎鼻腔に投与し、ジェットネビュライザーで dibekacin (DKB) を投与し、血中濃度を経時的に測定したものである。コカイン非投与群ではネビュライザー開始5分後よりDKBの血中濃度が上昇し、最高血中濃度はネビュライザー終了後30分に認めた。コカイン投与群ではネビュライザー開始15分までは非投与群と同様の血中濃度を保った。最高血中濃度はコカイン投与群の方が延長し、ネビュライザー終了後60分で認められたと報告した。このことにつき演者は纖毛運動の障害による排泄能の障害と考えている。この報告に対しキシロカインなどとの比較、キシロカインとコカインの組織障害性についての質問がなされたが、これについては試みていないと答えた。座長として、コカインの鼻粘膜障害性についての組織学的研究に関する方法につきコメントを行った。

次に鼻粘膜の透過性につき同じく三重大の間島氏が報告した。材料は人の下甲介粘膜で、正常下甲介と慢性副鼻腔炎に伴うポリープ、並びに通年性鼻アレルギーの患者にHRPをハンドスプレーで散布し、10分後に採取した粘膜を透過電顕でもって細胞間隙の観察を行った。正常対照群ではHRPは纖毛間隙のみに存在し、細胞間隙にも細胞質内にも入っていなかった。慢性副鼻腔炎の下甲介においても纖毛細胞間隙にはHRPは入っていなかったが杯細胞と纖毛細胞間、杯細胞間どうしの間に入りこんでいた。鼻アレルギー下甲介では多量のHRPが纖毛細胞間の細胞間隙に認められたと報告している。これに対して、tight junctionがlooseになるというのはどういうことか、鼻アレルギーの鼻粘膜の細胞間隙にHRPが入ることと水様鼻汁との関係はあるかなどの質問があり、これらに対して、ナトリウムチャンネルの変化が粘膜上皮の透過性に関係があると答えた。